

# 日大土木会会報

発行：日大土木会広報部会

〒101-8308

東京都千代田区神田駿河台1-8

日本大学理工学部土木工学科内

TEL：03-3259-0662

FAX：03-3293-3319

http://nichidai-dobokukai.com/

info@nichidai-dobokukai.com

## 会長挨拶

会長 一場 駿

「任期を終えるにあたって」

会員の皆様におかれましては、平素より日大土木会にご支援・協力をいただき誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

令和二年一月から続いていたコロナ禍でありましたが、令和五年五月八日より感染症法上の位置づけが五類に移行され、インフルエンザ同等の扱いとなりました。

これを受け会長・副会長会では、理事会、総会を対面、オンラインのハイブリッドで開催し、そして四年ぶりに懇



一場 駿 会長

親会を行うことを決定させていただきました。とはいえ病原が無くなったわけではなく感染者が増える可能性がありますので、まだまだ感染対策を十分に行いながら実施する状況であります。

さて会長としての二年間が経ちましたが本来おこなってきた活動である、在学生の教育支援のための講演会、卒業生による研究会の開催、会報発行、HPによる情報発信、各学科に教育補助費による支援、日大土木への各種支援事業を部会の活動を通して行う等々の活動でありましたが、コロナのため活動が制約されることとなりました。

また支援金となる教育補助金については、会員の高齢化、会費収入の減少等により、私

分の額となつてしまいました。

今後はぜひ皆様方のご協力を得て、再度活発な日大土木会の活動を再構築して頂きたいと思っております。

近年地球温暖化が影響していると思われる激甚災害、インフラの老朽化対策、国土強靱化等、土木工学の必要性がますます高まっていると思われ

このような時こそ学生、OB、教職員からなる三学部四学科の連携を深めるため、交流のプラットフォームとして日大土木会を継続拡大として若返りを図っていくことが必須だと思っております。

終わりに、会員の皆様、各学科の先生におかれましては日大土木会の意義をご理解いただき、是非諸活動にご支援を賜り、さらなる発展のために、喫緊の課題である会員の拡大をお願いいたしまして、はなはだ簡単ではございますが、退任のあいさつに代えさせていただきます。

それでは会員皆様方のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございます。

## 本年度の総会は対面式懇親会も開催予定

会長からの挨拶にありまして通り、令和五年度の通常総会はコロナ禍以前と同様に対面式で実施する予定にしております。また、総会終了後に、特別講演並びに懇親会も開催する予定で計画しております。

一昨年から実施してきましたオンライン方式での視聴も可能とする予定にしております。詳細につきましては会員にお届けした総会案内をご覧ください。

議案書につきましては、対面での参加の方には会場配布させていただきます。また、オンライン参加の皆さまにおかれましては、画面共有もしくは添付ファイルで送信も予定しております。

お手元に届いた総会案内に同封されている出席確認がきを七月十五日までに返送していただけますようお願い申し上げます。ご協力の程よろしく申し上げます。

## 土木系三学部四学科主任教授挨拶

毎号恒例となりましたが、本学土木系三学部四学科(理工学部土木工学科、同交通システム工学科、工学部土木工学科、生産工学部土木工学科)の主任教授の先生方より、本会会員向けに挨拶文をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

なお、各学科へは毎年本会より『教育補助費』として皆様からお支払いいただいた会費から各学科へ支援金として贈呈しており、学生の支援等に役立てていただいております。

## 理工学部土木工学科主任 中村 英夫



理工学部土木工学科・土木工学専攻の教室主任を務めております中村でございます。

日大土木会の会員の皆様はじめ多くの校友の皆様には、日頃より土木教室の教育・研究活動並びに学生の就職に多大なるご支援・ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、土木工学科の近況についてご報告させていただきます。この四月には新一年生二三〇名、博士前期課程三〇名の学生を新たに迎えました。一方、就職につきましては、皆様方の多大なご指導・ご支援により好調に終えることができ教員一同深く感謝をしております。具体的には、令和四年度は、後期課程一名を含め大学院三一名と学部二一名が修了および卒業をしました。博士後期課程の学生には「ラッソン回帰に基づくA/Eトモグラフィ法による土木構造物の非破壊検査」によって論文博士が授与されています。

また修了生・卒業生の進路の業種別の主な内訳は、公務員四七名(二〇%)、建設業九五名(四一%)、コンサルタント三〇名(一二%)、大学院進学三一名(一三%)、運輸六名(二%)となっており、その他の各方面にも多くの学生を送り出すことができます。

ました。  
 教育面における日大土木会からの支援の中で、例年、修士論文発表優秀者に対して「日大土木会奨励賞」を授与していただいております。令和四年度は三名が受賞し、三月二十五日の学位記伝達式で賞状と副賞の贈呈をいたしました。受賞者名と論文題目は次のとおりです。  
 唐澤奈央子

「ベルヌーイ・オイラー仮定とNURBS基底関数に基づく曲線はり要素の構築」  
 徳田翔也

「ウエイク中に配置された複数円柱の振動特性に関する数値流体解析」  
 安田康平

貴会からのご支援のおかげをもちまして大学院生の研究活動におけるモチベーションも高まっており、毎年、学会等で優秀発表賞を受賞するなど活躍しております。あらためて御礼申し上げます。  
 教員組織の面では、野村卓史先生、前野賀彦先生のお二

人が令和四年度末をもって特任教授の任期満了をお迎えになりました。また、本年四月より佐藤正己先生(建設材料)が教授に昇格されました。コロナ禍の制限もおおむね緩和され、キャンパスに活気が戻ってまいりました。皆様方のご健勝を祈念しますとともに、今後ともご支援、ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます次第です。

**理工学部  
交通システム工学科  
主任 小早川 悟**



日大土木会の皆様方には、日頃より交通システム工学科の教育研究活動ならびに学生へのご支援をいただき、御礼申し上げます。  
 交通システム工学科の教室の動きですが、藤井敬宏教授が、令和五年三月をもって定年退職されました。藤井教授は、昭和五十七年に日本大学

理工学部の副手として採用されて以来、入試実行委員長をはじめとしてIR委員会やFD委員会等で委員長を務められたほか、地方自治体の様々な委員会等で活躍されてきました。四月からは、特任教授として学科の教育活動に引き続きご協力をいただいております。

また、令和五年四月から新しく二名の助手を採用させていただきました。一名は青山恵里助手で、交通容量解析や交通工学が専門です。青山助手は、以前に本学科で助手を勤めていただいておりますが、その後、国土交通省の国土技術政策総合研究所に勤務され、再び本学科の助手として戻って来ていただきました。もう一名は、交通システム工学専攻の博士後期課程を卒業したばかりの積田典泰さんを助手として迎えました。

積田助手の専門は、交通需要予測や道路ネットワークの脆弱性評価です。さらに、山中光一先生が助教から准教授に昇格し、菊池浩紀先生が助手から助教に昇格致しました。また、本学科で助教をされていた兵頭知先生が徳島大学の准教授に就任され、助手をさ

れていた田部井優也先生が福岡大学の助教に就任されたため、それぞれ本学科から移動されました。

学生の卒業や就職状況につきましては、令和五年三月に、博士後期課程一名、博士前期(修士)課程二名、学部生一〇名の卒業生を送り出すことができました。また、就職に関しても前年度と同様に、民間、公務員、進学を合わせて就職希望者の就職率一〇〇%となっております。

これも、日大土木会をはじめとして多くの皆様方のご支援の賜物と感謝いたしております。  
 新入生については、本年四月には一一五名の新入生を迎え入れることができました。さらに、近年は編入学の入学生も増えてきており、昨年度は二次編入が一名、三次編入が一名の合計二名の編入生も交通システム工学科に編入学しております。また、コロナ禍の制限も緩和されつつあり、学科のオリエンテーションやスポーツ大会といったイベントも少しずつ再開させています。令和五年四月には、新入生を対象としたオリエンテーションとして、船橋

市内の見学会とパーベキュー大会を開催しました。  
 授業については、新カリキュラムが四年生まで完成し、今年度はJABEEの継続審査を受審する予定となっております。引き続き、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

**工学部土木工学科  
主任 仙頭 紀明**



工学部土木工学科並びに土木工学専攻の主任を務めております仙頭でございます。日大土木会の会員の皆様をはじめ、多くの校友の皆様方には、工学部土木工学科の教育研究活動、並びに学生の修学・就職支援に多大なご支援・指導を頂いておりますことに、心より厚くお礼申し上げます。  
 さて、工学部土木工学科の

近況についてご報告させていただきます。入試状況につきましては、昨年と同様に一連の不祥事の影響もあり、定員一六〇名を下回る一四八名(内女子七名)の新入生が入学しました。一方、大学院博士前期課程に一六名(内女子二名)が進学しました。以前は進学者が一桁台の年が続いていましたが、コロナ禍による学生生活への影響もあつてか、大学院進学者は増加傾向にあり、定員の二〇名まであと少しのところきています。引き続き、大学院における研究・教育にも全力で取り組んでまいります。

令和四年度の就職状況は、校友の皆様方のご支援もあり非常に好調で、就職率一〇〇%を維持しております。工学部卒業の新人が先輩方の職場に配属されることもあるかと思っております。その節はご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。  
 人事関係では、朝岡良浩先生(水文・河川工学研究室)が四月より教授に昇格され

て、教授八名を含む十六名体制で学科を運営しています。さて、今年度はコロナ禍が収束に向かう中で、対面形式

の授業に戻ったことで、大学らしい活気ある雰囲気に戻ってきました。一方、コロナ期間中に準備したオンライン授業用の教材等を活用することで教育効果を高めようとする取り組みも行われているようです。

「ロハスの池プロジェクト」(代表・手塚公裕准教授)は今年も継続しており、近隣の古川池を対象として、学生と教員、OB、地域住民および行政(郡山市)が治水・利水・環境保全の課題に協働して取り組んでおり、年二回の清掃活動に加え、年度末にはプロジェクト報告会([https://www.ce.nihon-u.ac.jp/newinfo/230330\\_tohaspondjt/](https://www.ce.nihon-u.ac.jp/newinfo/230330_tohaspondjt/))を開催しました。これに関連して、工学部キャンパスを横切り、古川池に流れ込む徳定川は、大雨の際に度々溢水していましたが、一〇年間かけて全面暗渠化する工事が昨年度から始まりました。洪水リスクを大幅に軽減するキャンパスの強靱化が進行中です。

さて、今年度はコロナ禍が収束に向かう中で、対面形式





また「土木女子の会」では「ふくしま復興再生道路」の建設現場を見学し(写真)、土木を学ぶモチベーションの向上と学生相互の親睦につながりました。

最後になりますが、日大土木会の皆様のご健康と益々のご活躍を心より祈念いたします。



写真 土木女子の会(工学部)での現場見学(くしま復興再生道路)



**生産工学部土木工学科  
主任 佐藤克己**

生産工学部土木工学科主任の佐藤でございます。平素より日大土木会の皆様方には、ご支援をいただき誠にありがとうございます。また、今年度も教育支援費をいただきましました。この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、最初に卒業生と新入生の状況を報告いたします。令和4年度の学位記伝達式では、学部生一七九名、大学院生は前期一三名、後期二名を送り出すことができました。就職先の内訳は、建設業が四六％、建設コンサルタン卜業が二七％、メーカーその他が八％、公務員が一五％、進学が四％であり、おかげさまで例年と同様に就職率は一〇〇％でした。しかしながら、ここ数年、民間企業の業績好調による積極的な人材獲得の影響から公務員や進学志望の低調が見受けられており、学科としては、特に大学院の魅力を鋭意発信し、進学者増に力を入れているところです。次に、令和5年度の新入生は二〇〇名、このうち女子学生は一四名でした。授業開始前に恒例のオリエンテーションをマザー牧場で実施し、フォトアドベンチャーを

通して、チームワーク力の大事さを学びつつ、楽しんできました。また、大学院進学者は、前期一六名、後期二名です。

学科の近況としましては、まず森田弘昭教授が定年を迎え、四月から特任教授となりました。さらに、二人の新任教員をお迎えしました。建設材料工学の杉橋直行教授と環境工学の南山瑞彦教授です。杉橋先生は、前職が清水建設で土木材料から維持管理まで幅広い分野の研究開発をしておりました。

また、南山先生は、国土交通省のご出身で下水道行政、環境行政に長く携わってこられました。土木会のみならず、共同研究やご相談ごとがありましたら、どうぞよろしくお願ひします。また、環境水理学の中村倫明先生が准教授に昇格されました。

さて、四月から通常の対面授業を展開しております。キャンパスならびに近隣の大久保商店街にも学生が多く行き交い、活気が戻ってきました。私も教員も多くの学生を前にして授業ができる喜びを感じながら、日々慌ただしく過ごしているところです。

研究活動では、朝香智仁先生が日本リポートセンシング学会から、また森田弘昭先生が日本下水道協会から論文賞を受賞されました。今後も学協会で活躍できるよう教員・大学院生とも日々研鑽してまいります。

最後になりますが、日大土木会の今後のますますのご発展をお祈りするとともに、引き続き日大土木会の皆様のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

**日大土木会奨励賞  
受賞からの喜びの声  
(理工・土木)**

理工学部土木工学科(大学院理工学研究科土木工学専攻)では、日大土木会からの教育補助費を平成二十年より「日大土木会奨励賞」として大学院生の表彰に使用させていただいております。中村主任教授のご挨拶にも書かれておりますとおり、修士論文の発表会において教員の採点によつてその選考がされております。

三名の受賞者から受賞の「喜びの声」をいただきました。



「指導教員への感謝」  
唐澤 奈央子

この度、日大土木会奨励賞を受賞させていただきましたのは、指導教員の長谷部寛准教授のおかげにほかなりません。

恥ずかしながら大学院進学は研究のためではなく、人にわかりやすく説明できるようにになりたいという気持ちで決定したものです。その思いに対して、十回以上にわたる学会発表、毎年の論文執筆、国際会議への参加など、多くの機会をいただき、その中でどうしたら自分の研究をわかってもらえるかを常に考えさせてもらいました。また目の前にある壁を乗り越えられず苦しい時期が続いたことは何度もありましたが、どんなに忙しいときでも一緒に打開策を考えてくださり、乗り越えることができました。

「大学院を振り返って」  
徳田 翔也

榮譽ある日大土木会奨励賞を頂き光栄に感じております。私は修士論文発表会で「ウエイク中に配置された複数円柱の振動特性に関する数値流体解析」という題目で発表しました。

修士論文の研究内容は、



指導教員と過ごした四年間、自分の性格や考え方ががらりと変わりましたが、唯一変えられずに残っているのはいつも自分が納得できるものを求めて、期限ギリギリになってしまいうことくらいです。そのくらい満足のできる、素晴らしい四年間をくださった指導教員の長谷部寛准教授に心から感謝しています。

今思えば学部生三年次のゼミ生の時に出会いました。私が在籍する風工学研究室ではゼミ生で風洞実験コンテストを行います。このコンテストは模型を作成し風の流れによる振動現象を、発生させる、または、抑制する、事で自分が想定していた現象を再現できるか競い合うものです。ゼミ生では風に関する知識が少なく、様々な現象を調べた上で今の研究に繋がる、ウエイクギャロッピング現象、に出会いました。

結局このコンテストでは納得する結果がでませんでした。自分が自分で調べて何回も実験を行うことでウエイクギャロッピングに興味を持ち、今まで楽しく研究を続けるモチベーションへと繋がったと感じています。

学業面では、高校までスポーツを主にしてきた分、自分に合う方法やコツが掴めずに大学三年生になってしまいました。しかし、ゼミナールと卒業研究を通して指導教員である長谷部寛先生と出会い、私の状況を理解し、私に合った丁寧な指導をして頂いたことで、学ぶ力や、今何をすべきか考える力を得られた

ように感じます。

学部時の成績があまり良くなかった大学院には一般入試を受験して入学しました。推薦で入って来た仲間と切磋琢磨し、同じレベルで研究を進められた事は、三年生でゼミに入る前の自分では想像も出来なかったと思います。今後もこの経験を活かし社会に貢献できる土木技術者を目指したいと思っています。

「大学として大学院で、

学んだ」とい

安田 康平



日大土木奨励賞という栄

誉ある賞を受賞できましたのは、私ひとりの力ではなく、これまでに私を指導して育ててくださった安田陽一教授をはじめ、日々を支えてくださった研究室の仲間のお陰だと実感しております。お世話なつた皆様に心から感謝申し上げます。この大学生生活を振り返ると、多くのことを経験し

学ぶことができず。その中でも、特に二つのことが得られました。一つ目がコツコツと知識を積み重ねることです。学部時代のときは「やるべきことをやる」という当たり前のことを意識して、先ずはコツコツと取り組む習慣を身に付けて

ました。大学の授業の知識や研究は一朝一夕で身に付くのではないと実感しています。大学院の授業では、蓄えた知識を活かすことで、科目ごとで繋がりがあるところが見えました。二つ目が目的の大切さです。研究を通して、目的を明確にして実験することで成果を得られることが学べました。学会発表でも目的という軸を明確にすることで、ブレない発表が出来たと思っております。また、相手の話を聞くときにも、相手の目的、つまりは相手の話す意図を汲み取れるように意識して聞くようになりました。

大学院修了はあくまでも通過点であり、社会に出てもからも勉強だと考えております。大学院を修了したての未熟者ですので、日大土木で学んだことを活かして、

早く一人前の土木技術者となれるように精進努力していきたいと思えます。

野呂祐介氏 (UR職員) 大学院生に対し 震災復興事例を講義

本年去る六月九日、十三時二十分からUR都市機構・職員の野呂祐介氏(工学部・平成十一年卒)の講演が学生向けに開催されました。



写真 院生向け講演会の様子 (理工・土木)

本講演は、大学院理工学研究科土木専攻の「地盤防災特論」の授業の一環として実施されたものであり、本年から対象を大学院生に引き上げました。講演は、URが取り組む震災の復旧・復興にスポットを当て、講演者が取り組まれてきた経験に基づき講義していただきました。講義の詳細及び講師の感想等につきましては、次号の会報で報告させていただきます。

訃報

昨年の会報発行から本年六月現在までに事務局に届きました会員の皆さまにこの場を借りて会員の皆さまに謹んでご報告させていただきます。

お亡くなりになられた方々の本会に対するこれまでのご協力並びにご支援に感謝しますと共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 磯矢節之 (昭和四十八年 理工・土木卒)
小安 正巳 (昭和四十七年 生産・土木卒)
高橋 忠士 (昭和三十九年 理工・土木卒)
福田 正之 (昭和三十九年 理工・土木卒)
藤井 正和 (昭和四十年卒 理工・土木卒)
村田 恒雄 (昭和三十四年 理工・土木卒)
柳田 友義 (昭和五十三年 理工・交通卒)
山下 弘美 (昭和三十一年 理工・土木卒)

敬称略・五十音順

名簿発行に向けて

名簿発行の意見を多くいただいております。現在、総会終了後の秋に発行できるように準備作業を進めております。個人情報保護を遵守しながらの発行を予定しております。ご意見をお待ちしております。

事務局より

会報第三十二号も無事発行することができました。コロナ禍が徐々に終息し

つつあるなか、大学も本年度の新学期から完全対面授業に移行しました。校舎には学生が多く戻ってきており、活気を取り戻しております。本会も活気を取り戻すような取組をしていきたいと思っておりますので、引き続きご支援の程よろしく願います。

また、本会報へのご意見・ご要望等がありましたら、事務局までご連絡をお願いします。(S・K)

